

審査結果の要旨

報告番号	甲 第 1334 号	氏名	川口 文
審査担当者	主 査 大島 孝一 (印) 副主査 赤木 由人 (印) 副主査 中島 収 (印)		
主論文題目： Programmed Death-Ligand 1 and Programmed Death-Ligand 2 Expression Can Affect Prognosis in Extramammary Paget's Disease (乳房外 Paget 病における PD-L1、PD-L2 発現は予後不良因子である)			

審査結果の要旨 (意見)

研究は、乳房外 Paget 病における Programmed death ligand-1 (PD-L1)/ Programmed death ligand-2 (PD-L2) および腫瘍間質 CD8 陽性 T 細胞の発現と予後を含む臨床病理所見との関連性について検討したものである。乳房外 Paget 病で外科的切除された症例 47 例を対象とし、免疫組織化学を行ったところ、腫瘍細胞の PD-L1 の発現は 13 例、PD-L2 の発現は 21 例でみられた。PD-L1 and/or PD-L2 陽性, CD8 低発現群は、PD-L1 and/or PD-L2 陽性, CD8 高発現群、PD-L1 and PD-L2 陰性群より累積術後無再発率が有意に低かった。乳房外 Paget 病において、腫瘍細胞での PD-L1/PD-L2 の発現は予後不良因子であることが示された。今回の研究より、乳房外 Paget 病への臨床治療へも応用が多いに期待される成果である。審査にあたり、副査より、今後の展開、また実験系の可能性に対する質問にも的確に回答が得られている。この論文は十分に学位に値するものと考えられる。

論文要旨

乳房外 Paget 病は、緩徐に進行することが多い悪性腫瘍であるが、一部の症例では転移を生じ、原病死に至ることがある。我々は、乳房外 Paget 病における Programmed death ligand-1 (PD-L1)/ Programmed death ligand-2 (PD-L2) および腫瘍間質 CD8 陽性 T 細胞の発現と予後を含む臨床病理所見との関連性について検討した。乳房外 Paget 病で外科的切除された症例 47 例を対象とし、免疫組織化学を行った。腫瘍細胞の PD-L1 の発現は 13 例 (27.7%)、PD-L2 の発現は 21 例 (44.7%) でみられた。PD-L1 and/or PD-L2 陽性, CD8 低発現群は、PD-L1 and/or PD-L2 陽性, CD8 高発現群、PD-L1 and PD-L2 陰性群より累積術後無再発率が有意に低かった ($p=0.026$)。乳房外 Paget 病において、腫瘍細胞での PD-L1/PD-L2 の発現は予後不良因子であることが示された。